

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

クイルズ

2001 (平成13) 年7月7日鑑賞

Data

監督：フィリップ・カウフマン
出演：ジェフリー・ラッシュ/ケイト・ウィンスレット/ホアキン・フェニックス/マイケル・ケイン

👁️👁️ みどころ

サディズムの語源は、この映画の主人公「マルキ・ド・サド」侯爵。刺激的だよ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<サド文学とは>

これは何ともしごい作品だが、日本ではそれほどメジャーではない。マルキ・ド・サド（サディズムの語源となったサド侯爵）の半生を描いた作品だから、ヨーロッパの映画だと思っていたら、そうではなくハリウッド映画。

主人公のサド侯爵を演じるジェフリー・ラッシュは、1996（平成8）年の「シャイン」でアカデミー賞主演男優賞をとった俳優であり、その後も続いて、アカデミー賞作品である、1998（平成10）年の「恋におちたシェイクスピア」や「エリザベス」にも出演した、名優中の名優だ。そのサド侯爵のファンで、精神病院内でのサドの執筆活動を手助けする、マドレーヌ役を演じるのは、何と、あの「タイタニック」でローズ役を演じた女優、ケイト・ウィンスレットである。彼女は精神病院で母親とともに働く「洗濯女」だが、サド文学の理解者であり、陶酔者だ。

サド文学は「倒錯した性欲」を描く反モラル、反秩序の代表のように言われながらも、今日までずっと生きてきた。私も大学時代、ひそかに回ってきた「ジュスティーン」などを興奮しながら、読んだ経験がある（もっとも、変な日本語訳になっているため、興奮すべき、変態じみたセックスシーンでも、何となくイメージがうまくできず、あまり面白くなかったが・・・）。サド侯爵の実像がこの映画の通りであったかどうかはわからない

が、私が思うに、当時のサド文学、サド小説は、性に焦点をあてて、人間の本性や欲望を包み隠さず、ストーリーにしたものだ。従って、文学としての高尚性や深みを求めているわけではなく、多くの人間がもっている、性への倒錯した欲望を、様々なバリエーションの中で露骨に描いたものだ。サディズム、マゾヒズムをはじめ、フェティズム、同性愛など、人間の性への欲望には、様々なパターンがあり、「これが正常で、これが異常」という線引きは、本来できないものだ（日本ではあたりまえのように考えられている、現在の「一夫一婦制」にしても、その歴史をたどれば、いろいろな変遷があり、必ずしもそれが唯一の正常なもの、といえるわけではない）。

＜サド侯爵の書くことへの執念＞

こんなサドの文学は、当時の庶民に熱狂して迎えられた（字の読めない人でも、口伝えに話を聞いて、その単語や文章だけで、感激、興奮しているありさま）。しかし、時の権力者には、こんな「腐敗」、「墮落」した小説が庶民に出回るとは、社会秩序を乱すものであるため、許すことはできなかった。そのため、当時のナポレオン体制下の支配者は、サド侯爵を逮捕して、精神病院に収容する。しかし、「サドの頭の中にある邪悪な考えを紙の上に吐き出させることが、サドの唯一かつベストの治療法だ」と考えた、精神病院長の神父の庇護の下に、サド侯爵は、収容された精神病院の中で、生々しいセックスシーンを綴った小説を精力的に書いていく。もちろん、この小説は、精神病院の檻の外には出ないことを大前提として・・・。

ところが、サド侯爵の協力者、マドレーヌは、このサド侯爵が書いた原稿を、神父に隠れて出版社に販売。闇の販売ルートの下で、サド侯爵の小説は、庶民の間でひそかに読まれていたのである。

しかし、遂にこれがバレてしまった。以降、サド侯爵は「変態小説を書かない」と約束させられ、またペンと紙を奪われてしまう。それでも、鳥の骨をペンとし、赤ワインをインクとして、シーツに小説を書くサド。さらに、自分の血で、自分のシャツに物語を書き綴るサド。最後には・・・。何と、自分の排泄物で、壁に物語を書いたサド。これほどまでに、人間の性への欲望を小説に書きたいと願っていたサドの小説は、一度は読んでみる価値がある筈だ。

この映画は、特別なチャンスがなければ知ることの少ないサド侯爵について、実はこの人はこんなすごい人生を送った人だ、ということを理解するのに、絶好の作品である。

2001（平成13）年9月記